

# 酪農近代化をすすめる

岡山県酪農大学校教授 上原茂喜

酪農が停滞しているとか、赤字経営で困るとか言われていますが、これは決して酪農だけの問題ではなく、倒産する企業が続出する現在の経済界のなかにあつて、農業だけが特別であるということはないと考えられます。この大きな「ヒズミ」の原因となっているものは、国内的なもの、対外的な問題が入り交って複雑な様相を呈しているのです。この中には酪農家に直接影響をもっているものも数多くありますが、しかしこれ等の大半が政策的な問題であつて、いま直ぐどうしようと言っても解決はなかなか困難なことが多く将来漸次改善されてくるものと考えられます。われわれ酪農家は意のある点を政策に反映するよう組織活動を続けることが必要であると考えますが、現実酪農家が「コマッタ、コマッタ」で過ごしていたのでは、それこそ経営は落農になってしまいます。

そこで、この波風に影響されやすい小規模な底の浅い酪農から、日本の立地条件に適した酪農経営に脱皮するために再検討する時期が来たのではないのでしょうか、県内の酪農も10年以上の経験を持っていますが、この辺で再度自家の経営を考えて、基本的な事柄からだんだんに積み重ねて少々の風雨にも倒れない強固なものにすることが肝要ではないでしょうか、将来近代的な酪農を築くためにどうしても実施していただかねばならない身近な問題について、酪農家の皆さんに検討していただきたいと考えまして2、3の事柄を御参考までに書きました。

## 一、酪農近代化には自主的活動が大切

これからの酪農は他力本願だけで発展を望むことは不可能であります。自分自身の研究と実行の積み重ねでなければ、安定した酪農建設は困難であります。

自主性といっても自己流ではありません。酪農歴10年以上の人の中に自己流に小さく固って自信過剰に陥った人を見ますが、これでは酪農も停滞して発

展を望むことはできません。これからの酪農は地域産業として伸びなければならないと考えます。そうならば個人の農業生産でなく、地域（町村単位または部落単位等）における組織的な生産にならなければ地域産業として成立しないのであります。よく言われる主産地形成ということはこの集団的な生産を意味しているのであります。各戸の自立酪農が集団の一員として団体的な活動をおこなうことが、今後の酪農経営を近代化する近道であるということができます。

酪農歴の長い酪農家や末端組織においては兎角沈滞気味で惰性的になりがちであります。時期が時期でありますので、この際酪農家も自分から積極的に経営の在り方を研究され、各戸の共通問題点は組織体において研究して対策を樹て一步一步近代化される必要があります。酪農家の自覚と根性こそ、これからの酪農の浮沈を決定するものであると言っても過言ではないと考えます。

## 二、多頭飼育の在り方を再検討する時期が来ている

### 1、数字上の多頭化

多頭飼育ムードにより、酪農家の飼育頭数が増加してきたことは事実であります。農林統計によりますと、昭和33年2月の調査では飼育戸数364,800戸、飼養頭数654,340頭、飼養戸数1戸平均1・8頭であったものが、昭和38年2月の調査では飼養戸数417,640戸、飼養頭数1,145,370頭、飼養戸数1戸平均2・7頭になっています。

また、経営耕地面積別乳用牛飼養戸数をみますと、酪農家は都府県では5反～1町と1町～1町5反の中間層が多く（32・0%、32・2%）乳牛飼養農家が中層に多くなって、5反未満の農家は酪農から離脱している傾向が強くなっています。岡山県も同じ傾向で1町～2町の酪農家戸数が昭和36年度38・4%、37年度41・0%、38年度43・6%で毎年増加していますが1町未満の酪農戸数は減少しています。

2、多頭化のねらい

統計上の傾向は右のようになっていますが、実際に現地飼育農家の状況を見ますと、多頭化本来のねらいからそれた酪農が案外あるということがあります。多頭化のねらいは牛乳生産を増加させて収入を多くさせることでありますが、逆に減少している農家もあり、むしろ精鋭主義で少頭数飼育の方がよいのではないかと考えられる場合もあります。年産乳量1頭全国平均が4,200kgで、酪農経営の安定を図るためには4,700kgといわれていますが、実際に上手に経営していない酪農家では1頭当り年産乳量が3,300kg～4,000kg未満の場合が多いのに驚いたのであります。この程度の搾乳量ではとても黒字の経営になることは不可能であります。頭数が増加すれば自給飼料の生産は倍加されなければならないし、乳量は逆に低下するのでは多頭化された意味がなくなり、合理的な経営ということはできません。この点充分に留意する必要があります。

3、多頭飼育農家の現状

飼育頭数の決定はその経営者の才能、土地、労働力、資本、技術等によって一定ではなく、個々の経営で違ってくるものであります。

筆者が酪農家を見て廻った結果からみますと、多頭飼育農家（ここでは4頭以上）の実情を調べた場合、どの地域でも産乳量の少ない農家は共通的に3つの次点があります。

第1に飼育頭数に比較して自給飼料の生産確保がなされていないことであります。年間の飼料平衡等の考えもないし、給与計画、飼料生産計画、もないのが共通で、ただ慣習的に一部自給している程度であります。

表1、酪農経営のメヤス（現代農業による）

経営規模		5頭飼養	10頭飼養	15頭飼養
成育	成牛	5頭	10頭	15頭
	育成牛	1	3	3
経営概況	従事者数	0.8人	1.5	1.8
	飼料畑規模	100a	170	250
	自給飼料作付	反収1万Kg 小計 10万Kg 1頭に2万Kg (田を牧草畑にすれば反収2万Kgだから畑の面積の半分)	ほかに70a共同牧野利用 畑反収1万Kg 牧野4,000Kg 小計 19万8,000Kg 1頭に約2万Kg	ほかに100aの共同牧野利用 畑反収1万Kg 牧野5,000Kg 小計 30万Kg 1頭に約2万Kg
	自給率			
収入	年間搾乳量	4,500Kg(24石)×5=225,000Kg	4,500(24石)×10=450,000Kg	4,900(25石)×15=730,000Kg
	牛乳単価(Kg当り)	@29円08銭(1.875Kg当り54円)	@29円80銭(1.875Kg当り54円)	@26円92銭(1.875Kg当り50円)
	牛乳販売金額	653,000円	1,300,000円	1,978,000円
	子牛販売金額	70,000円	118,000円	160,000円
頭数	♂	2	5	8
	♀	2	3	4
単価	合計	@5,000円@30,000円	左に同じ	左に同じ
	合計	723,000円	1,420,000円	2,138,000円
支出	購入飼料費/収入	27%	27%	27%
	飼料費合計/収入	55%	49%	48%
	施設償却費	70,900円	178,500円	256,800円
	経営費合計	448,000円	799,500円	1,195,000円
経営成果	差引利益	204,100円	442,000円	686,200円
	1頭当り差引利益	40,820円	44,200円	45,750円
	所得率	28%	31%	32%

第2に飼養管理技術が未熟で折角の飼料も配合の仕方が悪く飼料の利用効果を下げ、しかも乳牛の体力を落しそのために泌乳量も減少し、加えて繁殖障害を起し種付が不能になっている場合があります。またこれとは反対に能力のある牛を持ちながらその能力を發揮させずに泌乳量の少くない場合があり、繁殖はこの場合良好であるのが普通であります。

第3に自家で飼育する牛の能力や個体の長所短所もわからず、搾乳牛の健康状態等がどのようになっているかなどが不明の場合が多く要するに乳牛の観察能力がないといえます。そのために低能力牛が長いあいだ飼育している農家もあります。

多頭化することは酪農経営を向上させる上に重要なことでありますが、乳牛を増数しただけでは経営は良くならないということを考えなければなりません。参考のため「酪農経営のメヤス」第1、「資金調達メヤス」第2を入れておきますから検討の資料にして下さい。

## 岡山畜産便り 1965.02

表2. 資金調達メヤス

		5 頭 飼 養	10 頭 飼 養	15 頭 飼 養
資 金 調 達	施設資金額	810,000円	2,455,000円	3,730,000円
	乳牛購入資金額	650,000円	1,300,000円	1,950,000円
	飼料購入資金額	16,250円	32,500円	48,750円
	(調達率)	(1/12)	(1/12)	(1/12)
	その他の資金	8,830円	18,250円	25,000円
	(調達率)	(1/6)	(1/6)	(1/6)
	合計所要資金額	1,485,080円	3,805,750円	5,753,750円
	自己資金調達率	30%	20%	20%
	自己資金額	455,520円	761,150円	1,150,750円
	借入資金額	1,039,560円	3,044,600円	4,603,000円
	支払利息(年5分5厘)	57,176円	167,453円	25,3165円

表のよみ方、(表1)たとえば、乳牛5頭飼養すると、乳代と子牛の収入が723,000円、購入飼料費などの支出が、518,900円で、差引利益は204,100円、乳牛1頭当り差引利益は40,820円になる。

(表2)次は資金調達の方の表をみてください。5頭の乳牛飼養のために1,485,080円の資金が必要である。その中で施設資金は810,000円で半分以上を占めている。自己資金を3%もつとすれば455,520円である。乳牛1頭当りの所得資金高は30~38万円になっている。

この資料は岩手県志和農協の「志和地区農業近代化計画」の中からまとめられたものを「現代農業」誌から転引用したものである。

### 三、近代化する酪農は計画の樹立と記帳から出発

従来の農業では自給的性格が主体であった関係か計画を樹てる習慣が殆んどなく、しかも結果(実績)の記録がとられていない場合が多く、勘にたよっている農業といえます。これでは計画生産はもちろんのこと、自家の経営を検討するにしても、改善するにしても何も拠り所がなく、また指導者がその酪農を指導するにしても極めて困難で適切な指示はできないこととなります。

今後の酪農は企業的な性格を持って、数字と頭を使う経営にならなければなりません。ちょうど会社の重役のように計画と運営と実績を常に念頭に持っているように、酪農経営者も計画性をもって経営しなければなりません。最初は簡単で最も必要なものから手掛けてゆけばよいと考えます。例えば牛乳生産計画、飼料給与計画(月別)、自給飼料生産計画等で、これらの計画には必ず実績を記帳しなければなりません。この計画や記録が1年間実行されますと、次年の改善点や方法が明瞭にわかり、酪農経営の向上が眼に見えて進展してきます。酪農近代化は計画と記録がなされて初めて成立するものであります。

### 四、酪農近代化は後継者の教育なしでは達成できず

先進国の、古い歴史をもつ酪農と日の浅いわが国の酪農とは比較にならない程の差がありますが、しかし日本は日本なりの立地条件に応じた酪農がある筈であります。こらからこの新しい酪農方式を開拓する努力が続けられなければなりません。この新事業を実施する人は、現在の酪農家を除いて誰があるでしょうか。指導者にしても政治家にしても酪農家の代りに搾乳してくれるものはない筈であります。酪農家自身が自らの手で根気よく研究を積み重ねて初めてなされるもので

あります。酪農は2代かかって一人前になるといわれますが、このことは他の農業部門と比較して難かしいという例えであると思われます。この難かしい酪農も年毎に変化して、さらに高い技術と総合的な経営能力を必要としています。この高度の革新技術と近代的経営管理法を導入してくれるものは、次代の若い後継者ではないでしょうか。優秀な後継者を確保し、育成することが酪農近代化のもっとも重要な基本問題ではないでしょうか。

#### 近代化は相互理解より

しかしながら、現実には後継者として農業に残る青年が極めて少くないということであります。青年が都会に出る理由は多くあると考えられますが、そのもっとも共通して強く訴えられることの1つは、親または周囲の人の物の考え方や生活態度が旧態依然としているということ、古い形式のみにこだわり、人と人の明るい心の触れ合いとか、積極性や自立性のない沈滞した湿めっぽい生活環境に嫌や気がさしているようであります。

年長者から見れば「ナンダ」そんなことかと思われますが、若い世代の者はそれなりに現代の世相を非常に敏感に吸収して、それに則応するような物の考え方を持っています。ところが親の方は長い間の農村の慣習が身につけてしまっていて、心にかかりながらもなかなかぬけきれない状態にあります。テレビや電気洗濯機を使用しながら、一面

## 岡山畜産便り 1965.02

では物の考え方や生活態度にズレがあって、若い人との間に嫌なムードがかもし出されているようであります。もちろん若い人の発言が全部よいとは考えられませんが、要は農村の生活環境に不満があることではないでしょうか。次には経済的な問題であります。このことについては皆さんも充分御承知のこととありますので略しておきます。

酪農経営は金を得ることだけが目的ではなく、その家庭全体に精神的な安らぎのある生活をつくることも酪農の目標であります。彼等の発言にも充分耳を傾けていただき、お互いに理解しあって、次代の後継者の教育と育成に関心をもたれて、将来の皆さんの酪農発展に努力していただきたいと存じます。